書評　市井外喜子・根岸亜紀著『天草版平家物語研究』

小嶋栄子

記録的な猛暑と言われた今年二〇〇七年の夏、つかの間の上京の旅を終え長崎空港に降りたって帰途の車に乗る。大村へ向かって箕島大橋を渡り切ると、すぐ右手側の広場で天正遣欧使節四人の像が、いつものように私を迎えてくれる。遠く東京を離れて四年目になる私は、この像を見るたびに、本学大学院鈴木康之先生のゼミ時代のもう一人の恩師市井外喜子先生と後輩根岸亜紀さんのことを思い出している。そのような折り、この天正遣欧使節と非常に関係の深い「キリシタン版」のうちの一本である「天草版平家物語」に関する研究について、市井外喜子先生と根岸亜紀さんお二人の共著による『天草版平家物語研究』（二〇〇七年　おうふう）が上梓されたことに、心よりお慶びを申し上げる。

市井外喜子先生は、『方言と計量分析』（一九九三年　新典社）など、長年にわたって方言を計量言語学的な面から研究されてきた。さらにその手法を「天草版平家物語」の研究にも取り入れ、「『天草版平家物語』語句ノート」（一九九〇年『日本文学研究』29）以降、関連する多くの業績を残されて、『天草版平家物語私考』（二〇〇〇年　新典社）『天草版平家物語私考　続』（二〇〇五年　新典社）を刊行された。これらの研究は一貫して、先生ご自身がおっしゃっている「文学的な読みの側面と、国語学的な読みの側面の融合」を意図したものであり、関口忠男先生をして「・・・著者のこの側面（筆者注：「文学的な読みの側面」のこと）に対する果敢な挑戦は、極めて重視される。・・・これによって、『天草版平家物語』が今まで見せなかった、新しい姿をわれわれの前に現すことになったわけである。・・・」（「書評『天草版平家物語私考　続』」二〇〇七年『日本文学研究』46）と言わしめていらっしゃる。

根岸亜紀さんは、キリシタン文献「ローマ字本」のローマ字表記や分かち書きのあり方に着目し、本学大学院の平成11

（一九九九）年度修士論文で市井外喜子先生の指導のもと「キリシタン文献のローマ字表記」を執筆した。それ以降、「キリシタン文献における日本語のローマ字表記の意義」（二〇〇四年『日本文学研究』43）「キリシタン文献　文学作品研究から」（二〇〇七年『国文学解釈と鑑賞』九〇八）など、精力的にその方面の論文を発表されている。

本書の全体は二部構成になっており、Ⅰ部では、「天草版平家物語」についての歴史的な位置づけやその概説およびローマ字本であるためにみられる表記や分かち書きの特徴について考察されている。Ⅱ部では、「天草版平家物語」とわれわれになじみのあるいわゆる「古典平家」との相違を仏教思想の面から比較し、さらに「天草版平家物語」で使用されている語彙を中心として、依拠本および資料を担う語句について考察されている。

「Ⅰ　天草版平家物語のローマ字表記・分かち書き」の最初の「天草版平家物語とは」の概説部分において、その概略を解説しているのだが、そこではキリシタン文献の資料価値についても言及している。すなわち、「キリシタン文献が他の資料と比べて重要視されるのは、「ローマ字本」があるからである。日本語がポルトガル語の発音にもとづくローマ字によって書き表され、特殊な発音符号も考案されている。ローマ字本は、日本語が音素文字であるローマ字で表記されているので、各音素がもとのことばでどのように発音されていたかがわかれば、日本語がどのように発音されていたかがわかることになるのである。」と述べられているのである。

ローマ字は単音文字であり、分かち書きを必要とする文字である。著者たちは、単音文字であることによって、文字からその文字が書かれた当時の発音を推測することができるという理論をフルに活用している。そして「天草版平家物語」をもとにして室町時代の音韻体系を表にあらわし、当時のわが国ではまだ「四つ仮名」の発音の区別がみられたこと、ハ行音は（現在のような「h」音ではなく）まだ両唇音であったこと、撥音「ん」にあたる「m」「n」「~」で表記されている音のうち「n」と「~」との違いは表記の便宜上の違いであろうということなどを実証している。また、分かち書きをすることによって生まれる単語意識という面から、「以って」は次第に「を」を伴って「を以って」という一語として意識されていくが、「於いて」の方は「に」を伴う「に於いて」という一語として意識されるまでには至らなかったらしいと推測している。私には、ここで著者たちは、「天草版平家物語」を研究対象としてローマ字表記の意義と分かち書きの意義をのべることを通して、ローマ字教育をないがしろにしているわが国の国語教育に対する痛烈な批判をも提示しているように思えてならない。

さてⅡ部では、まず「天草版平家物語と古典平家」において両者を比較し、「天草版平家物語」が「古典平家」から仏

教思想をただ排除しただけでなく、不干ハビヤンが積極的にキリスト教の教えに見合う内容へと改めようとした意図が見受けられることを指摘している。

次に「天草版平家物語」の依拠本についてであるが、著者のお一人である市井外喜子先生は、上述した『天草版平家物語私考』『天草版平家物語私考　続』において、それぞれ天草版平家巻第二、天草版平家巻第四第八章段とも、その依拠本として百二十句系統本を推定されている。本書においては、天草版平家巻第四第二十章段について考察しているのであるが、この部分においても、その依拠本として百二十句系統本、特に斯道文庫本との近似性を見いだしている。さらに続く「木曾の後世を弔うもの」でも百二十句系統本である斯道文庫本と小城本が天草版平家を導いたと推定しており、「天草版平家物語」の依拠本は百二十句系統本であろうという仮説をますます強力に裏付ける結果となっている。両本とも九州に伝わるものであるから、天草という地域性から考えても全く妥当であり、不干ハビヤンの手にしていたものが、私の身近に現存していたと思うと胸が高鳴ってくる。

最後の「2　語彙を巡って」では、天草版平家冒頭にみられる「Conata」「Sonata」という右馬之允と喜一検校の上下関係を明確にしめす対称詞としての用法が現代方言にも生きていること、一昨日を意味する「VOTOTOI」は天草版平家では見られず、古典平家の高野本・龍大本にのみ「おととい」として見られ、その用法が現在まで続いていること、現在一般的である「びっくりする」を意味する「VODOROQU」が天草版平家ではすでに通常の使用として用いられていること、の3点が述べられている。ここでは「書物のごとくせずに両人相対して雑談をなすがごとく」に、聞き手兼進行係の右馬之允に対し喜一検校が語る、という趣向に仕立てられた「天草版平家物語」から得られる当時の口語の中に、現代日本語の萌芽が見られることを的確に指摘している。

前述の関口忠男先生は

「・・・著者の研究成果の公刊は、伝統的な『平家物語』研究と、言語学的研究の流れの中にあった『天草版平家物語』研究とを架橋するという、大変重要な役割を果たす・・」と絶賛されているが、私は、本書の公刊によってそれはより強固なものとなり、「天草版平家物語」の文学性をさらに研究するための礎となったことを確信するものである。

（二〇〇七年三月　おうふう刊　A5判　二五六頁）

序

I　天草版平家物語のローマ字表記・分かち書き

天草版平家物語とは

1　ローマ字表記（ローマ字表記の意義、ローマ字表記と音韻論、「~」考）

2　分かち書き（分かち書きの意義、「motte」考、「voite」

考）

Ⅱ　天草版平家物語の語彙

天草版平家物語と古典平家

1　依拠本を巡って（天草版平家物語巻第四第二十章段、木曾の後世を弔うもの）

2　語彙を巡って（天草版平家物語と対称詞―右馬の允と喜一検校の関係から―、VOTOTOI　VODOROQU）